第17回対照言語行動学研究会　口頭発表 概要

2018. 9.29　於 青山学院大学

|  |  |
| --- | --- |
| タイトル | 日仏人称詞と主観性 |
| 著者名（所属） | 牧　彩花（東北大学大学院　文学研究科　文化科学専攻　フランス語学フランス文学専攻分野　博士前期課程） |
| 連絡先Eﾒｰﾙ | nekochan.hana@gmail.com |
| 発表内容　英語とフランス語は形態的に極めて類似した言語であるが，日本語はこれら二つの言語と根本的に性質を異にしているため，対照言語学研究においても，英仏語との差異が強調される傾向にある．これは人称詞に関しても同様で，フランス語の人称詞の体系は英語のそれと類似しており，日本語人称詞とは大きく異なっている．しかし，言語形態や統語機能ではなく，具体的な言語使用等に着目すると，英語にはない，フランス語と日本語の意外な類似性も見えてくる．本発表では，中村(2009)の提唱する「認知モード」概念をもとに，日本語とフランス語の人称詞を，英語との対照を交えながら考察する．フランス語の不定人称詞« on »に目を向けると，« on »を用いた人称表現が英語のそれとは性質が異なり，むしろ日本語人称表現に見られるような，発話現場に密着した主観的な認知を反映させたものであるということが分かる． 不定人称詞« on »とは，それ自体で積極的な意味を持たない人称詞であり，それゆえ，発話現場によって指示対象が変化する．« on »の興味深い点は指示対象の多様性だけでなく，他の人称詞の代わりに« on »が用いられた場合，もとの人称詞を用いた場合と異なる「情的なニュアンス」が発話にもたらされることである．これは« on »自体が意味を持たないことによるものであり，« on »への転換で，発話の状況依存性が高まり，発話場面に応じた発話者の様々な情意表明が可能になると考えられる．日本語の「人」にも指示対象の不定性が観察され，人称転換によって情的なニュアンスを生み出すという点においてもフランス語の« on »に類似しているといえるが，「人」は「他者性」という積極的意味を持つがために« on »ほど自由な振る舞いはできず，この点で両人称詞は大きく異なっている．　フランス語の« on »はその不定性によって，発話者の主観性を様々な形で表す人称詞である．多様に存在する人称詞の中から発話場面や対人関係に応じて，常に適切なものを選択する日本語人称詞とは振る舞いの原理が異なるものの，発話現場に密着した発話者の主観性を担うという点で両人称表現は類似していると言える． 参考文献廣瀬幸生・長谷川葉子(2010)『日本語から見た日本人―主体性の言語学―』，開拓社．中村芳久(2009)「認知モードの射程」，『「内」と「外」の言語学』, pp. 353-393, 開拓社．春木仁孝(2011)「フランス語の認知モードについて」，『言語における時空をめぐってⅨ』, pp. 61-70, 大阪大学大学院言語文化研究所．牧彩花（2018）「人称の転換に関する人称の日仏対照研究―« on »と「人」を中心に―」,『フランス文学研究』，第38号，pp. 23-36, 東北大学フランス語フランス文学会．SCHAPIRA, C. (2003) « Qui est *ON* ?», *Actas del XXIII Congreso Internacional de Lingüística y Filología Románica,* pp.363-372, International Congress of Romance Linguistics and Philology. |